

2010年9月8日

／ 風流のはじめは蝦夷の雁の風呂 ／

渡島半島・島牧の海岸に、町営？の小さな温泉があります。風呂場から海岸まで百メートルほどでしょうか、湯船の縁越しに波打ち際に手がとどきそうな半露天風呂でした。海岸に「覗いてはいけない」と、警察の出した制止看板があつて、笑ってしまいました。女風呂は隣ですから、海岸に出てみようかなど思っていて、ふっとうかんだのが冒頭の一句でした。口ずさんで、また笑ってしまいました。

記憶力のよい方は、すぐお気づきでしょう。

そっくりの古典があります。

／ 風流のはじめは蝦夷の田植え歌 ／

…そう、俳聖・芭蕉の一句。『奥の細道』の須賀川の辺りにあります。つまり、冒頭の句は、それをパロったわけです。芭蕉さん、ごめんなさい。

しかし、ほんとうに雁風呂が焚けそうな海岸だったのです。いや、昔は、雁の残していった小枝を集めて風呂を焚いていた村人がいた、と思われる日本海に面した海岸でした。むろん、現在もやはり、雁は行き帰り渡ります。

／ 雁風呂や風、浪、鷗、夕茜 ／

／ 海境に日はまろび落ち雁の風呂 ／

…など、湯上がりのほてった体を海風にさましながら、すでに死語といわれる「雁風呂」をつかい十句ほどを詠みました。

海岸道路を走って、日本を一周したのは、そう十五年くらいまえのことです。ワンボックスの車で、日程の八割は車で寝ました。いわば、車中泊。

余談ですが、まだこのコトバが大っぴらには使われない頃で、信越地震以後、マスコミに頻繁に出てくるようになり、いまでは、このタイトルの旅雑誌がありますね。

／車中泊凍えて醒めて石と化す／

／放浪の果の岬や秋の旅／

／寒林やねぐら決らぬ車旅／

…ついでながら、「車旅」ということばは辞典では見あたりません。考えて気がつき
ました…日本には、車を長旅の、主たる移動手段とした時代がなかったからでしょ
う。大昔の東海道や中山道など主要行路は、ほとんどテクシーでしたからね。現在
は、セダンで北海道を一巡りしている旅マニアとあったこともありましたが…。

／ 裸木のうろにももんが尋ねけり ／

／ ラジュウスや風を背中に鱗を焼く ／

／ 浪音を聞きつ寝まるや萩と月 ／

…ラストの一句、あれっと思われる方があったら、ごめんなさい。下五を誰かから聞
きませんでした?? 市振の海岸での車中泊でね、遊女なんておりませんでした
が…。

茅ヶ崎 山内重昭